－所蔵作品紹介－

澄川　喜一　SUMIKAWA Kiichi

そりのあるかたち―94

作品データはこちら

この作品は太い柱を中心に、柱の上下に添えられたパーツと上から地面まで伸びる細いパーツの四つから構成されている。タイトルにある「反り」を描いているのは、細いパーツである。また柱と下の支えは直線的で平らにカットされた面を見せ、一方上にのったパーツには樹皮と不規則な凹凸が残されている。この両者を人工と自然として対比すると、そりの形は言わば両者の中間に位置する。というのもそれが鋭角的にカットされていながらも、「反る」という木本来の性質を生かしているからだ。作者の言葉を借りれば、そりとは「真っ直ぐな線が先端から少しずつしなっていくという、直線と曲線が有機的に結び合った形」である。つまり人工と自然・直線と曲線の両方にまたがる性質がこの「そり」にはあるのだ。シャープでシンプル、そして緊張感が魅力でありながら、澄川の造形が鋭利さや冷たさに陥らない鍵は、こんな「そり」のアンビヴァレントな性質を彼が深く理解し生かしているところにあるのかも知れない。

「そり」を核とした彼の造形の追求はすでに20年にわたって続けられている。そのなかでもこのようにそりの形を床に接地させて、周囲の空間のみならず大地までも「そり」の力学に直接取り込もうとしている例は多くはない。

もっとも、反るという現象そのものは珍しくはない。作者自身が例にあげている日本刀、ひきしぼった弓、発芽し伸びていく植物などは私たちにもすぐに思い浮かぶ。しかし澄川個人の記憶のなかでとりわけ大きな位置を占める「そり」があるとすれば、それは少年時代を過ごした山口県岩国市にある錦帯橋のようだ。この有名な太鼓橋を彼は愛し、「木で造られた虹のよう」に思ったという。分断された二つの地点をつなぐ存在である橋と、その美しい比喩である虹。空中と大地との間に張り渡された本作品の「そり」は、そんな記憶とことのほか重ね合わさっているのではないだろうか。

澄川喜一は島根県生まれ。1958年に東京芸術大学彫刻専攻科を修了、翌年より新制作展に発表を始めた（1963年会員）。また山口県庁の庭園造形をはじめ、野外彫刻にも精力的に取り組んでおり、受賞も多い。1995年より東京芸術大学学長を勤めている。

※引用は澄川喜一『そりのあるかたち』（平凡社、1996年）より

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より